

令和6年度 奈良市立月ヶ瀬こども園 研究実践概要

園長名 西久保 和子
全園児数 25名

1. 研究主題

生き生きとあそぶ子どもをめざして
～「またやりたい」と自ら考え工夫し遊ぶことのできる援助や環境を探る～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

昨年度の取り組みの中で、「自分からやってみたい」と思い遊ぶことや遊びを継続して
いったり展開していったりすることの弱さがまだまだ見られた。そこで、職員間で話し合
い、子ども達が自ら考え工夫し遊ぶことのできる援助や環境について再度探ってい
き、生き生きとあそぶ子どもをめざし、研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・自ら考え工夫し遊ぶことのできる援助や環境を探り、主体的に遊ぶ子どもを育成する。

②研究の重点

- ・一人一人の「やってみよう」「もっとしたい」「またやりたい」という気持ちに寄り添
い子どもの発達段階や興味関心を踏まえながら、子どもが自ら考え工夫して遊ぶことが
できる援助や環境を工夫していく。
- ・職員間で子どもの思いを理解し、子どもの姿について共通理解を図りながら、具体的
な取り組みを話し合い、保育について課題を出し合い改善に努める。

③活動の方法

子どもの姿（「またやりたい」と気持ちが動いている姿） 援助・環境

【0歳児】「ゆきであそんだよ」1月

保育者がお茶碗に入れた雪を用意すると触ったり、スプーンで繰り返し
上下に動かして感触や音を楽しんでいた。保育者が「シャリシャリ音がす
るね」と声をかけ、一緒に触っていた時に「あー冷たいわ」と表情が変わ
った保育者の顔を嬉しそうに見て、にこにこしていた。しばらく側で様
子を見守り、今度は食紅で色を付けると色が変わったことに驚いた表情をした。「色かわ
ったね」と声をかけると「せんせい、せんせい」と保育者にお茶碗の中の雪を見せて、色
が変わったことを知らせようとしていた。ずっとスプーンを上下に動かして触っていた
雪もだんだん水っぽくなってくると、その中に手を入れてみたり、ままごとの鍋やフライ
パンに移したりして長い間遊んでいた。



<反省・評価>

子どもが初めて見る雪との出会いを大切にしたい、触れさせたいと言う思いから雪を用意した。安心できる保育者に見守られながら、真っ白でシャリシャリした雪を触ったりスプーンで上下に動かしたりすることを楽しんでいた。保育者にもっと遊びたい気持ちを十分受け止めてもらったり、色が変わった時の表情を見逃さずに声をかけたりしたことが、じっくりと満足するまで遊ぶ姿に繋がった。

【1歳児】 「みてみて～！できた！」 2月

室内でソフト巧技台や三角ストーン、バランス平均台を使って、跳ぶ、渡る、くぐる、登るなど、体を動かすサーキット遊びのコースを準備した。子ども達はトンネルやたいこ橋、すべり台を思い思いに遊んでいた。友達が保育者と手を繋いでトンネルや三角ストーンなどの上を歩いたりしているのを見て、自分もやりたくなったようで「て つないで～」と言って手を伸ばし、保育者と手を繋いで「せ～の！」と言いながら跳び下りたり歩いたりする事ができた。「跳べたね」「歩けたね」と言葉がけをすると、繋いでいた手を離し、パッと保育者の方に顔を向け、満面の笑みを浮かべて「やったぁ～」とその場で飛び跳ねて喜んだ。友達や周りにいた保育者に「みてみて～できた！」と言って「もういっかいする～」と嬉しそうに何回も繰り返し遊ぶ姿が見られた。



<評価・反省>

友達と同じようにしたいと思っている事を、保育者と一緒に体を動かした事で安心して楽しみ、できた事へと繋がったと思われる。「できるようになったんだなぁ～」と育ちを感じられた瞬間でもあった。

同じ年齢でも一人一人の月齢、発達状況の違いを認め、子どもの様子に合わせて手を添えたり、体の使い方を一緒にしたりしながら伝えていき、遊ぶ楽しさを感じられるようにしていきたい。

【2歳児】「こおりきれないよ」 1月

雪を洗面器に集め触って遊んだあと、そのままにしておいたのが翌日に氷になっているのを見つけて「こおりやー」と喜んでいました。部屋に持って入り、触っては「つめたいわー」「大きいこおりやー」と驚いたり喜んだりする姿が見られた。保育者も「触っていい？」と聞き、「本当に大きい氷やね」と子ども達と一緒に触ったり持ったりしてみた。そして、ままごとの包丁を持ってきて氷を切ろうとするが、「固いわ、きれない」と言いながら何回も繰り返す。包丁を置き、遊びでいつも使っているフライ返しやししゃもじ、スプーンなどいろいろと持ってきては、やってみようとする姿が見られた。子どもの「もうなんできれないのよ」「こおりきりたいのに」と言う声を聞き、「固い氷どうしたら切れるかな？」と声をかけると、「お家でママが使う包丁やったら切れるかもね」と保育者も子どもの話に共感した。



<反省・評価>

前日、雪を集める時に自分達でままごとコーナーからお茶碗やスプーン、お玉を選んで持ってくる姿が見られたので、今回も自分達で選び持ってきた道具で遊ぶ様子を見守るようにした。家庭で母親が料理をする時に包丁でいろいろな物を切る姿を見ているからなのか、氷を切りたいということに繋がったのではと考える。子どものやってみようとする気持ちを大切にしながら子どもの発見や何気ない一言を聞き逃さないようにしていきたい。

【3歳児】「そーっとお水をかけたらな・・・」6月

砂場に保育者が大きな丸い葉っぱを摘んでおいた。興味を持ったA児は「これ、使いたい！」と葉っぱを手にすると、茶碗を取りに行き砂を入れた。A児は葉っぱを地面に置き、茶碗の砂を乗せるとクルッと包み「出来た！」と葉っぱを持ち上げるが、砂がサラサラとこぼれ落ち、「あれっ」という表情で持っていた葉っぱをじっと見ていた。「砂、サラサラだったね」と言葉をかけると、「んー、お水欲しい！」とペットボトルに水を入れてきた。そして、葉っぱの上に砂を置き水をかけたが、勢いが強く流れてしまう。「あー」と声を出して保育者の顔を見た。「大丈夫、もう一回だね」と保育者がと伝えると、今度は、「そーっど、そーっど」とつぶやきながら水をかけ、葉っぱをクルクルッと巻いて皿の上に並べていった。保育者が「すごい！葉っぱのおだんご出来たね！」と声をかけると、「そーっとお水かけたらな・・・出来た！」と答えた。



<反省・評価>

春から保育者と一緒に砂や水などの感触を楽しんだり、園庭やプランターの草花を料理づくりに使ったりして遊んできた。次第に自分のしたい遊びを見つけ自ら「やってみよう」としたり、様々な玩具や用具に興味を持ち、試してみようとしたりする姿が見られるようになっていった。A児がどのようなことに興味を持っているのか、何を不思議に思っているのか、どのような言葉がけや関わりが必要であるのかなどを探りながら遊びを見守るようにした。サラサラの砂が葉っぱからこぼれ落ちたり、水の勢いで砂が流されてしまったりした時に、A児自身が「何でかな？」という思いを巡らせ、「次はこうしてみよう」という思いを大切にすることで「やってみたら出来た！」という思いに繋がったと考える。

【4歳児】「ドングリが渋滞してる！」10月

転がし遊びコーナーでトイを2～3本つなげてコースをつくり遊び始めた。A児はいろいろな形や大きさの容器の中から小さいカップを選びドングリ入れて何度か転がし、B児はゴール地点で転がってくるドングリをタイヤへと送っていた。途中B児は5歳児が使っているバケツに気づき、同じようにバケツいっぱいに入れたトイの上まで運び大量のドングリを一気に流した。すると、ゴール地点でドングリは詰まった。B児は嬉しそうに「渋滞してる！」と言いながらトイを傾けるとタイヤの中にドングリは全部落ちた。「車みたいにドングリいっぱい並んでるね」と声をかけると、A児は「そうやで！」と言い、今度はゴール地点のトイに積み木で蓋をし、バケツやちりとりで集めたドングリを流し「もっと転がして」「これぐらい？」とA児と声をかけ合いながらドングリ渋滞をつくり、蓋を外すとガラガラ～と落ち「わぁ！！」と声をあげ、「もう一回しよう」と二人で遊び続けた。



<反省・評価>

トイを1本立てかけて転がし遊びをしていたが、繰り返しトイの置き方を試しながら遊ぶ経験の中で2～3本つなげたコースをつくることできるようになってきた。いろいろな形や大きさの容器や沢山のドングリを用意したことで、使いたいときに自分で選んで遊ぶ姿に繋がった。ドングリを転がしや偶然起こったドングリの渋滞を楽しみ、友達や保育者と一緒にその面白さを共有していた。複式学級ならではの、5歳児の遊びを見たり真似たりしながら自ら考えて遊び、展開していくことのできる環境をこれからも探っていきたい。

【5歳児】「おもいのはこっちのおいもののに・・・？」 10月

夏野菜の収穫時に毎日数を数えたり、大きさ比べをしたりしてきた。秋になり、いもほりをした後、大小様々な大きさのイモを見ながら「これ大きいね」「こっちの方がもっと大きいで」と友達同士で話していた。保育者が「どのおいもが一番重いかな？」と声をかけるとA児が「僕たちの重さはかるのを使ったらいいんじゃない？」とアイデアを出し保育者と一緒に体重計を用意した。イモを一つ乗せ「これは1(0.1kg)だ！こっちは3(0.3kg)だから大きいね！」と言いながらA児は友達と交代しながらイモの重さを量り始めた。保育者が用意した重さ表示の数字と同じ場所に量ったイモ並べていき、「2が一番多いね」「これは7、一番大きい！！」と友達とやり取りをしながら分類していった。すると、A児が2つのイモを持って「おもいのはこっちなのに、これの方が大きいよね」と太さの違いに気づき、友達にも伝えると「ほんまや！え？なんで！？」と目を合わせて驚いていた。



〈反省・評価〉

遊びや活動の中で数字を見たり数を数えたりして、数への興味や関心が広がってきている。収穫したイモの大きさを比べる場面で重さに着目して欲しい思いから保育者が声をかけた。今までの経験から体重計を連想し、友達と一緒に実際に体重計を使って重さを量ることで現実的な事柄に気づき、知る面白さや不思議さを感じる姿に繋がった。子ども達の発達や興味に寄り添いながら、遊びを通して関心が広がるような環境や援助を探っていききたい。

5. 研究の成果

- ・子どもがどんなことに興味関心をもって遊んでいるのかに目を向け次の環境づくりをしたり、季節ごとに自然に触れる事ができるよう機会を逃さず事前に準備をしたりしておく大切さを改めて感じる事ができた。また、保育者の思いや願いと子どもの興味関心、したいことが合わず遊びが続かないこともあった。子ども達と遊びの振り返りの時間を設けたことで「次はこうしたい」という子どもの思いを受け、子どもと一緒に遊びの環境を整えることで意欲や探求心にもつながっていった。
- ・子どもの姿や実態を毎月のカリキュラム会議や乳児会議、幼児会議の場でも出し合い、それぞれのクラスで子どものしたいことが実現できるような環境や援助を見直し、実践していった。継続して話し合ったり共有したりすることで子ども達が「またやりたい」「こうしたらいいかな」と考え、意欲的に遊ぶ姿につながった。

6. 今後の課題

- ・小規模園で異年齢児一緒に過ごすことが多く、他学年の刺激を受けながら自分のしたい遊びを見つけ一緒に遊ぶ姿がある一方で、発達に応じた年齢毎の遊びや経験ができるように環境の工夫を行い、遊びの保障をしていくことも必要である。
- ・今後も子どもの様子を話し合い実践することを繰り返しながら進めていくことが大切であるので、引き続き職員間で話し合う時間を確保していきたい。特に、幼児と乳児の保育者間で話し合う時間を更につくっていくことが課題である。